Photo 4. A Lady Burning Joss Sticks in Front of the Altar of Lord Kwantee.
Photographed by the author.

that Chinese temples in Medan performed during the Dutch colonial era. The correlations between Medan Kwanteebio, the Tjong brothers and Medan Chinese are yet to be explored further.

References

Buiskool, Dirk Aedsge. 2019. *Prominent Chinese During the Rise of a Colonial City: Medan 1890–1942*. Doctoral Thesis, Utrecht University, Utrecht.

Chang, Queeny. 1981. *Memories of a Nonya*. Singapore: Marshall Cavendish Editions.

Jansen, Gerard. 1934. *De Andere Helft: Geloof en Gebruiken van onze Oostersche Stadgenooten*. Medan: Köhler & Co, pp. 59–64.

Knapp, Ronald. 2010. *Chinese Houses of Southeast Asia: The Eclectic Architecture of Sojourners and Settlers*. Singapore: Tuttle Publishing.

妖怪ではない「カッパ」

──岩手県遠野市の「民話」文化の古層に向かって──

森　内　こゆき *

「妖怪の研究してるんだよね．
カッパ好きの女の子がいるよ！」

遠野に着いて，宿泊施設を経営する女性に開口一番にこう言われた．筆者はカッパに会いに訪れる人がいるとは，さすが「民話のふるさと」遠野だな，と思った．日常生活では「カッパ好きの女の子」にはなかなか出会えないであろうし，驚くべきことであったに違いない．しかし，筆者は遠野までの道中ですでに不思議な出来事に巻き込まれており，このとき地に足のつかない感覚だったので，「カッパ好きの女の子」への理解が追いつい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　盛岡市・報恩寺五百羅漢像

写真 2　カッパの人形

ていなかった．

盛岡から遠野までの道中で，筆者は「見える」人に出会っていた．その人は 50 代の男性で，左足を引きずりながら報恩寺の羅漢堂を拝観していた（写真 1）．報恩寺は岩手県盛岡市にある曹洞宗系寺院で，1394 年（室町時代・応永元年）に当地を治めていた南部氏によって創建されたと伝えられている．藩政末期まで南部藩から手厚い保護を受け続けつつ，民衆によって厚く信仰されたその寺院堂内には，立派な金の観音像を三方から取り巻くようにして，同じく寄木造に立派な金のメッキが施された五百羅漢像が安置されている［岩手県編纂 1963: 1360–1375］．彼が「見える」といったのは，この何百体もの「羅漢さん」が「動いている」のが「見える」ということであった．彼は 20 年程前に死を意識するほどの強烈な出来事を経験し，それを期に「見える」ようになったのだと言う．彼は遠野までの道中にも「神さん」の声を「聴いて」は，その声の在り処である寺社仏閣へと筆者を案内し，たくさんの「神さん」に会わせてくれた．

そうした道程を経て遠野に到着した筆者は，狐につままれたような心地で宿泊施設の女性と話していた．そのような感覚のなかで，筆者はその「カッパ好きの女の子」も「見える」人のように霊的存在の姿が見えたり，声が聴こえたりするのだろうかと考えていた．その子も「見える」人のように，超能力者集団か何かに所属しているのだろうか，それとも見えないがゆえに，かの遠野でならカッパに出会えるのではないかとここへやって来たのだろうか．

遠野に到着した 3 日後，その女の子と会うことになった．彼女はカッパが好きというのは本当だと語ってくれたが，彼女が好きなカッパは小学生の頃から彼女が持っているカッパの人形のことだという．その人形の写真を見せてもらったところ，なんと同じものを筆者も所持していた（写真 2）．彼女はその人形について詳しく，この人形を製造・販売していた会社が倒産したためこの人形はすでに販売されていないこと，そのためこの人

形を持っている世代はかなり限られていること（彼女と筆者は同い年，当時 24 歳である）などを教えてくれた．この人形がきっかけでカッパが好きになり，幼い頃から家族に連れられて度々遠野を訪れては，カッパ淵や伝承園などのカッパにまつわる観光地で遊んでいたそうだ．

彼女は 2020 年 10 月に地域おこし協力隊として遠野に移住してきたのだが，今回の移住とカッパは無関係だという．何度も遠野を訪問するうちに，遠野の土地柄や，伝統芸能である獅子踊りなどに魅力を感じ，移住することに決めた．移住してからは宮守川上流組合で農作業や商品生産に携わっている．彼女と対面したこの日は，組合の作業所や販売所を案内してもらったほか，猟師の男性を紹介してもらったり，遠野の民話や伝説に登場する続石やキツネの祠などへ連れて行ってもらった．あちこちを巡った最後に，遠野七観音のひとつである宮守観音を訪れた（写真 3）．日が沈む間際だった．彼女は以前，宮守観音の裏山でシカと対峙し，畏怖を感じたことがあると語った．宮崎駿監督映画『もののけ姫』に登場する「シシ神」を想起したという．

シシ神は作中では森の化身であるが，最後に人間によって殺される．彼女に紹介してもらった猟師によれば，「害獣」を追い払ってほしいという依頼は後を絶たないという．彼は本職である山中での狩猟とは別に，里野におりてきた熊を駆逐したり，観光地にできた巨大な蜂の巣を駆除したりしている．遠野での暮らしは野生動物や昆虫と隣り合わせで，そ

写真 3　遠野市・宮守観音堂

の恩恵と被害を受けつつ彼らは生活している．

その夜，彼女と筆者は一緒に夕食を食べた．そこで再びカッパの話になった．彼女は彼女のカッパと会話できるという．カッパは一般的には妖怪に分類されるが，彼女にとってはどうであろう．彼女にとってカッパは妖しいものでも，怪しいものでもない．彼女とカッパとは，すでに愛ある関係で結ばれている．

次の日，筆者はカッパ淵と伝承園を訪れた．この 2 つの観光地の管理人であるカッパおじさんは，「カッパの民話は，埋もらされてきた人たちの話」だと語った．それは彼らにとって比喩ではない．彼によれば，カッパは飢饉の際に川に流された赤子に由来するという．だから遠野のカッパは赤い．遠野には，盛岡と同様に五百羅漢像があるが，この五百羅漢像は江戸時代の天明の飢饉で亡く

写真 4　遠野市・五百羅漢像

なった人々を供養するために，大慈寺の和尚・義山が石々に掘ったものであると伝えられている［遠野市編纂委員会 1976: 14］．この遠野の「羅漢さん」たちは山の中の自然石に刻まれており，現在では石ごと地面に埋もれ，苔生したものも多い（写真 4）．そして実際に飢饉で亡くなった人々は，幕府や南部藩からの課税や取締の圧力，そして何より自然の猛威によって，土に「埋もらされた」人たちであった．こうした人々について語られた口頭伝承であるから，民話は遠野では本当に「埋もらされてきた人たちの話」なのである．

数日前に出会った「見える」人とは，「神さん」に呼ばれたので，遠野の五百羅漢のふもとにある卯子酉神社を一緒に訪れていた．しかしながら，五百羅漢像が横たわる山中には入らなかった．埋もれている「羅漢さん」を誤って踏んでしまいそうで怖いので，「羅漢さん」がいる山中には行かないと彼は言っていた．彼にとっては盛岡の「羅漢さん」も遠野の「羅漢さん」も，信仰や供養といった宗教的な感覚と結びついていた．

南部藩の居城のあった盛岡の「羅漢さん」が中央幕府あるいは京の都と藩との間の巨視的な関係から説明されることが多いのに対して，遠野の「羅漢さん」は，農民の視点からみた個々人の死にまつわる微視的な歴史のなかに位置づけられている．民話の背景にあるこうした微視的な歴史を真摯に受けとめている人たちには，「カッパ好きの女の子」をはじめとする地域おこし協力隊の人々も含まれる．彼女の先輩には，地域おこし協力隊として遠野にやって来て，そのまま遠野で結婚・起業し，遠野に根を張った人がいる．彼は移住後に『遠野物語』と遠野の土地性との密接な関係に魅了され，『遠野物語』を題材とした数々の企画を遠野の内部で立ち上げている．その彼と他の移住者ら，そして遠野で生まれ育った人々との関係は，未だ筆者の深く知るところではないが，彼らの間にはひとつの共有された知があるように思われた．彼らは，みな遠野の魅力を十分に理解しつつも，それを外部に広めようと試みるより先に「遠野についてもっと知りたい」，「まずはたくさんの地元の人と遠野の良さを共有したい」と語った．地元の人と遠野について語り合うためには，地元の人と同じかそれ以上に遠野について詳しくなければならない．彼らはやみくもに遠野で見知った民話文化を世界に発信しようとするのではなく，ひたすらに遠野の魅力を掘り下げている．そのような彼らの取り組みは，彼ら自身の意図を越えて，世界から注目を集めつつある［多田・富川 2021］．

今，遠野では「埋もらされてきた」民話を発掘するどころか，民話の奥深く深くにある自然の「わからなさ」にまで掘り進めようと

する，大きな動きがおこっている．遠野で暮らす人々は，自然世界のなかに自らの知識が及ばない / 身体的な力が及ばない「わからなさ」が潜んでいることを多かれ少なかれ知っていて，その未知のものがすべて既知に変わることは決してないということを悟りつつも，その「わからなさ」を虚心坦懐に探求している．筆者もカッパに導かれて，その大きな流れに巻き込まれている．

引 用 文 献

岩手県編纂．1963．『岩手県史』5 近世篇 2．名著出版．

遠野市史編纂委員会編．1976．『遠野市史』3．万葉堂書店．

多田陽香・富川　岳．2021．〈https://note.com/iwate_lf/n/n3cc662dc3ab2〉（2021 年 3 月 17 日）

食でつながる国境なき世界
──日本とレバノン料理──

中　西　　萌 *

はじめに

世界三大料理といわれたら，どの国の料理を思い浮かべるだろうか．フランス料理，中華料理，そしてレバノン人ならきっとこう答えるだろう，「レバノン料理」と．どの 3 つの国の料理を世界三大料理に入れるかについては諸説ある．このレバノン料理とは，かつての歴史的シリア地域，つまり現在のレバノン，シリア，ヨルダン，パレスチナ／イスラエル，トルコ南西部でみられる料理の総称である．レバノンは移民送り出し大国であり，レバノンからの移民が世界各地にレバノン料理屋をもたらしたことから，歴史的シリア地域の代表選手としてその名が知られるようになった［黒木 2007: 50–60］．歴史的シリア地域の料理には，地域ごとに多少の差異があることを承知したうえで，本稿ではこれを広義の「レバノン料理」と呼ぶことにする．

レバノンでの出来事

料理は，異文化世界と自分の間の目に見えない境界を取り払う最も簡便なコミュニケーションツールである．レバノンでのフィールドワークを行なった私にもそのような現地経

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科